

2025年度 江波プロジェクトレポート

【 担当教員 】

学部・学科・専攻	職名	氏名
代表者:地域共創センター	准教授	三上賢治

【 プロジェクトの概要 】

目的

「江波プロジェクト」は、広島市中区江波栄町にかつて存在し、1992年に閉業するまで地域住民に長年親しまれてきた銭湯「よしの湯」を対象に、その空間を地域の貴重な資源として再評価し、新たな活用の可能性を探ることを目的として実施している地域展開型芸術プロジェクトである。よしの湯は閉業後、約30年以上にわたり本格的な活用がなされておらず、現在も空間の一部が事務所や倉庫として使われるにとどまっている。こうした状況を背景に、本プロジェクトでは2023年度から現地の視察や地域リサーチを重ね、江波地区の歴史や記憶を学びながら、銭湯跡という独自の空間を活かした芸術実践に取り組んできた。

本プロジェクトの特徴は、単に空き空間を展示会場として利用するのではなく、かつて地域の日常生活を支えていた銭湯という場所の記憶や公共性に着目し、その歴史的・文化的価値を現代的な視点から捉え直そうとしている点にある。銭湯はかつて、人々の衛生を支える生活インフラであると同時に、世代や立場を越えて人が交わる地域コミュニティの場でもあった。そうした場所性をふまえ、学生が地域住民や関係者との交流を通して、芸術・デザインによる活用提案や表現活動を行うことで、地域資源の新たな意味づけと魅力発信を目指している。これは、計画書上でも「地域の魅力づくり」「アート・デザインによる地域課題の解決」「地域資源の活用提案」として位置づけられている。

2025年度は、これまでの視察・展示活動の積み重ねを踏まえ、地域と交流する子ども向けワークショップの開催と、銭湯空間を活かした学生展示の企画・実施を中心に展開した。12月には、小学生を対象とした「バスボムとコースター作り」ワークショップを元銭湯「よしの湯」で実施し、地域の子もたちが銭湯空間に親しみながら創作活動を体験できる機会を設けた。また、年度末に向けて展示の準備・実施を進め、学生が銭湯跡という独特な空間の特徴を読み取りながら作品を構想し、地域に開かれた表現の場を形成することを目指した。これにより、江波プロジェクトは、地域資源の保存や活用をめぐる課題に対し、芸術を媒介として地域と大学が協働する実践の場として発展した。

実施内容

2025年度は、芸術学部の学生を中心にプロジェクトを進めた。油絵専攻や彫刻専攻の学生を含む複数の参加者が関わり、銭湯跡「よしの湯」の空間調査、展示企画、ワークショップ準備、広報物制作、現地での設営・運営などに取り組んだ。学生たちは、銭湯という特殊な建築空間の特徴や、江波という地域の歴史性、さらにそこで営まれてきた人々の暮らしの記憶に目を向けながら、どのような表現や企画がこの場にふさわしいかを検討した。

特に、2025年12月13日(土)に開催した子ども向けワークショップでは、元銭湯の洗い場空間を活用し、ケロリン桶や風呂椅子など銭湯らしい要素を取り入れながら、「バスボム」と「コースター作り」の体験プログラムを実施した。対象は小学校1年生から6年生まで、定員は10名とし、地域の子どもたちが創作を楽しみながら、普段はなかなか触れることのない銭湯跡の空間に親しむ機会を創出した。完成した作品を銭湯内に並べ、最後に浴槽空間を背景として記録写真を撮影するなど、場所の特性を活かした印象的な体験となるよう工夫した。ワークショップは無料で実施し、保護者の同伴も可能とすることで、地域の家庭が安心して参加できる開かれた企画とした。

また、年度後半からは、2月末から3月にかけての展示実施に向けて準備を進めた。学生たちは、銭湯跡の内部空間を読み解きながら、浴槽、洗い場、壁面、湿度や光の入り方など、この場所ならではの条件を活かした展示表現を検討した。銭湯空間そのものが持つ記憶や痕跡を作品と応答させることで、一般的なギャラリー空間では生まれにくい表現の可能性を探った。また、展示に向けては、現地の清掃や環境整備、SNS等を通じた発信、地域関係者との調整も行い、単なる作品発表にとどまらない、地域に開かれた場づくりを志向した。これらは当初計画にある「SNS発信」「清掃活動」「活用を考えるWS」「イベント企画」「学生の展示」といった実施内容にも沿うものであった。

下脇



11-24



広島市立大学「江波プロジェクト」

子供向け コーティングショップ



参加費
無料

広島市立大学の学生が、地域の子どもたちと一緒に、お風呂で使えるバスボムやカラフルタイルを使ったオリジナルコースターを作ります！

12月13日(土) 10:00-12:00

開催場所：元鷗洞「よしの湯」
〒730-0836 広島県広島市中区江波安町1-1-24 宇和橋1階

お申し込みはこちら →



【プロジェクトでの成果等】

本プロジェクトの成果は、第一に、銭湯跡「よしの湯」という未活用空間を、地域資源として再認識し、その活用可能性を継続的に探る実践を積み重ねることができた点にある。2023年度から現地視察や地域リサーチを開始し、2024年度には芸術学部学生や卒業生による展示を複数回実施、さらに2025年度にはワークショップと展示へと展開することで、単発のイベントではなく、継続的な地域連携プロジェクトとしての基盤を築くことができた。よしの湯は長年使われない状態が続いてきたが、本プロジェクトを通して、過去の生活文化を宿した空間としての価値に改めて光を当て、地域の新たな魅力発信の拠点となり得ることを示した。

第二に、芸術・デザインを媒介として、地域住民、とりわけ子どもたちやその保護者が銭湯空間と新たなかたちで関わる機会を創出できた点大きい。12月のワークショップでは、銭湯という非日常的で印象的な空間の中で、子どもたちが自らの手を動かしてバスボムやコースターを制作した。体験そのものに場所の記憶や雰囲気結びつくことで、単なる工作教室ではなく、地域に残された空間資源の存在を身体的に感じながら参加できる企画となった。銭湯の洗い場や浴槽まわりを活かした設えは、子どもたちにとっても強い印象を残し、地域の過去と現在をゆるやかにつなぐ契機になったといえる。

第三に、学生にとって、地域に存在する未活用資源に対して芸術的視点から関わり、企画・制作・運営・発信までを実践的に学ぶ教育機会となった点も重要である。参加学生は、通常の教室内制作とは異なり、現地の状況や安全面、参加者の年齢層、地域住民との関係性など、複数の条件を踏まえながら表現と企画を構想する必要があった。こうした過程を通じて、学生は作品を制作する力だけでなく、空間を読み取る力、他者と協働する力、場に応じた表現を構成する力、社会と接続する実践力を養うことができた。さらに、卒業生や他専攻の学生とも関わりながら取り組むことで、学年・領域を越えた学びの場が形成された点にも教育的意義がある。

第四に、展示やワークショップを通じて、銭湯空間の文化的・歴史的価値を可視化し、地域に開かれた表現の場を形成できた点が挙げられる。広島市内にはかつて多くの銭湯が存在していたが、現在ではその数は大きく減少しており、銭湯文化そのものが失われつつある。そうした中で、よしの湯のような空間を単なる老朽化した空き物件としてではなく、地域の生活史やコミュニティの記憶を宿す場所として捉え、その空間特性を活かした芸術実践を行ったことは、地域文化の継承と再解釈の両面において意義深い取組であった。芸術が歴史的空間の保存・活用の可能性を広げる手段となり得ることを、具体的な実践を通して示すことができた。

以上のように、江波プロジェクトは、

- ① 未活用の銭湯跡を地域資源として再評価する視点の提示、
- ② 子ども向けワークショップ等を通じた地域交流の創出、
- ③ 学生の実践的・協働的な学びの深化、
- ④ 展示を通じた文化的空間の再解釈と魅力発信、

を実現した取組であった。今後は、展示やイベントをさらに重ねながら、地域住民・行政・関係者と協働し、よしの湯の持つ歴史性と空間性を活かした持続的な活用モデルへと発展させていくことが期待される。